

小学校学習指導要領「音楽」の目標に関する研究

初等教員養成課程で学ぶ学生のために

A study on the overall objectives of elementary school curriculum “Music” :For students studying in elementary teacher training courses

飯泉祐美子(帝京科学大学)

Yumiko IIZUMI (Teikyo University of Science)

(要旨)

第9次小学校学習指導要領の「音楽」の目標は、それまでの学習指導要領の目標と比較すると大変文字数が増えた。そのため小学校教諭免許状取得のために音楽科教育法を履修し学んでいる学生にとって、その本質をとらえることが分かりづらくなった。

この問題を解決するために音楽科教育法授業内で協働的な学びの取り組みを実践し、目標を可視化する試みを実践した。

可視化した本実践によって、音楽科教育の目標の本質的な意味と、音楽科教育の存在の意義を正しい方向で理解でき、成果を見ることが出来た。また、副次的に、協働的な学びによる成果も見られた。

(キーワード)

小学校学習指導要領「音楽」、初等教員養成課程、音楽科教育法、協働的な学び、

1. はじめに

平成29年3月に告示された小学校学習指導要領第2章第6節「音楽」(第9次学習指導要領)の目標は、これまでの小学校学習指導要領「音楽」の目標と比較すると大変文字数が増えた。このことは教科「音楽」を主たる専門教科とせず、小学校教諭免許状取得のために音楽科教育法を学んでいる学生にとって、その本質を捉えることが以前のものより分かりづらくなったと考えられる。

そこで本研究は教職課程で教科「音楽」を主たる専門とせずに学ぶ学生に、「音楽」の授業の本質を理解させ、「学力の3要素を担保する授業展開をしてほしい。」「活動あって学びなしというものになってほしくない。」という目的からその取り組みに着手した。

2. 問題提起

本研究における問題点を探るにあたり、小学校学習指導要領における音楽科の目標の新旧対比を行う。

〈旧〉平成20年3月告示 小学校学習指導要領第2章第6節音楽 目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。

〈新〉平成29年3月告示 小学校学習指導要領第2章第6節音楽 目標

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに

関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

旧学習指導要領では、「表現と鑑賞そしてその二つの領域が相互にかかわりあう活動を通して、児童が思いや意図をもって音楽を表現したり、想像力を働かせながら音楽を聴いたりするなど、児童一人一人が感性を豊かに働かせながら主体的に活動に取り組む態度を大切に、楽しい音楽活動を展開していく。そしてそのことが生涯を通して音楽を愛好し、生活の中に音楽を生かしたり音楽文化に親しんだりする、そのような態度を、音楽の学習活動を通してはぐくみ、そして、一人一人の豊かな心を育てる。」という一本のルール上に手立てから目標までが発展的に掲げられている。

しかし、新学習指導要領では「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」ということを念頭にまとめられており、そのうち、「何ができるようになるか」が「学力の三要素」である「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」として目標となった為、学生にとって一文ごとの理解は可能であるが、それら相互の関係の成す音楽科の目標が捉えづらいという学生が現れた。このことは指導案を作成させる際に明らかとなり、その点は大きな課題となった。

本研究はこの課題解決が目的である。

洪屋隆一は、業務プロセスを見える化（可視化）する3つのメリットとして「プロセスを可視化することで、その登場人物を明確にすることができる。」「プロセスを可視化することで、どのプロセスで何

を管理すべきかが明らかになる。」「プロセスが明確になっていると、スタッフ教育がやりやすくなる。」と述べている。これは本研究で言い換えると「重要用語を洗い出すことができる」そして、「重要用語を明確に定義することができる」、「重要用語の洗い出し、定義が明確になったことで、文言が整理でき、目指す目標が明らかとなる」ということである。

すなわち、音楽科の目標を可視化する事は、学生の理解の一助となるであろう。洪屋氏に限らず、近年、ビジネスにおいて可視化するメリットが各所で述べられている。その利点は「誰もが同じ手順で同じ作業ができる」「業務に不慣れな人でもできる」「特定の人しか作業ができない状況を作らない」などである。

このような可視化のメリットを最大限活用することにより、学生が主体的に目標を理解できる取り組みを期待できる。

本研究では小学校学習指導要領の理解の一助として、次期開講履修学生を対象とした、その活用を試みた。

3. 実践方法と対象学生の状況

音楽科教育法全15回で完結する授業の第2回目、第2時に位置付けた。授業では第1回第1時に音楽科の領域など、音楽科としての教科に関する知識と、「学校の音楽教育の授業はどうあることが理想的であるか。」等、知識情報を学習することを前半に実施し、後半は、各自教科の目標を音読し、更に解説も音読させた。その後、音楽科教育は何を目指しているのか、各自の目標理解の時間とし、A4用紙を配布し、自由記述形式でまとめさせた。この際にはスマートフォンでの検索を認めた。

この時点で目標を可視化した学生は若干いた。これはスマートフォン検索が可能であったことが要因と思われるが、大方の学生は目標内の文言の意味の確認のための使用であった。そこで第2時の予習課題として、各自目標を理解しやすいように可視化し、次時で同じチームの学生の前(4人グループで1チー

ム)で目標について学びあう協働学習の時間とすることを伝え、各自が可視化することを課題とした。また、チームで学びあった内容をさらに可視化するものを作り、チームごとにクラス全体の前でプレゼンテーションし、学びを共有していくという授業スタイルを進めることを確認した。

履修学生は初等教育専修の学生(必修)のみならず、英語専修、国語専修、数学専修、理科専修、社会専修、保健体育専修といった、中学校高等学校の教員免許状取得が主たる専修となっている学生も履修している。偶然であるが協働学習を行うチームは教科専修ごとにチームが組まれたため、可視化するにあたり、それぞれの主たる教科の特性が見受けられるようなものがあり、このことは想定外であった。尚、第1時に本研究の趣旨を説明し、署名承諾済みである。

4. 授業実践

可視化された音楽科の目標の発表では、チーム内でのプレゼンテーションはたいへん活発に行われたことから、各自が自信をもって発表する様子が窺われた。

主たる教科の特性を理解した可視化の手法が各々に見られ、多様なスタイルの発表が行われた。

(1) ベン図を用いた可視化

ベン図は複数の集合の関係や、集合の範囲を視覚的に図式化したものである。つまり重なり合った共通部分が視覚化によって明らかとなる。

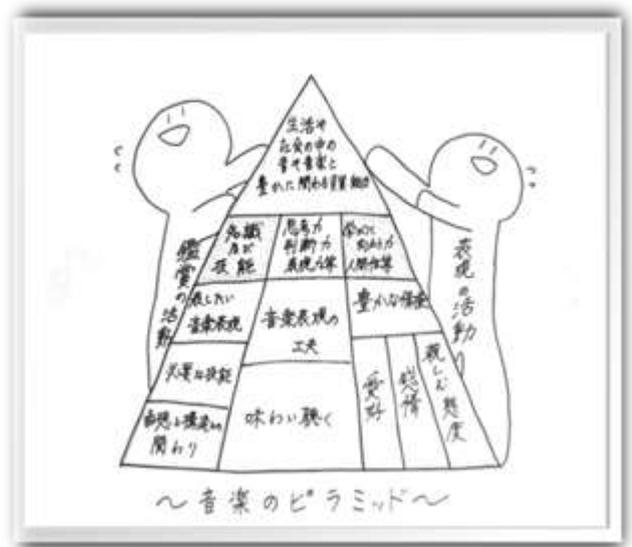


〈図1〉

〈図1〉は、数学専修の学生による目標を可視化したベン図である。

(2) ピラミッド図を用いた可視化

ピラミッド図とは、複数の項目やデータをピラミッド状に表示するダイアグラムである。比例関係と階層関係を明確にレイアウトすることができる。規律のある変化、階層の関係などを表現する際によく使用される。

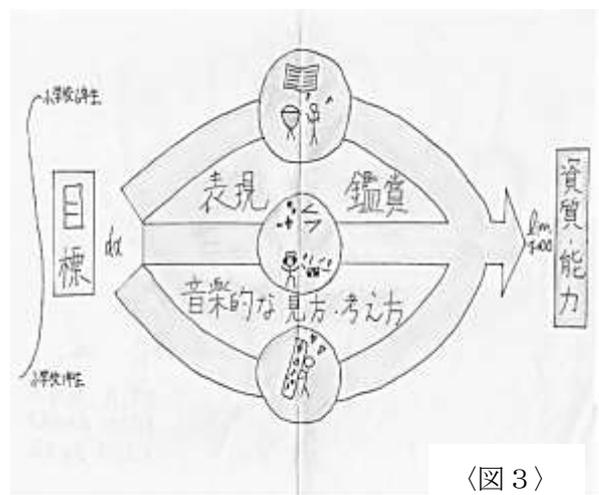


〈図2〉

〈図2〉は、社会専修の学生のものである。

(3) ベクトルスタイルを用いた可視化

ベクトルは大きさだけでなく、向きももった量を表すが、そのスタイルを用いたものである。



〈図3〉

〈図3〉は、数学専修の学生による目標のベクトルスタイル図である。

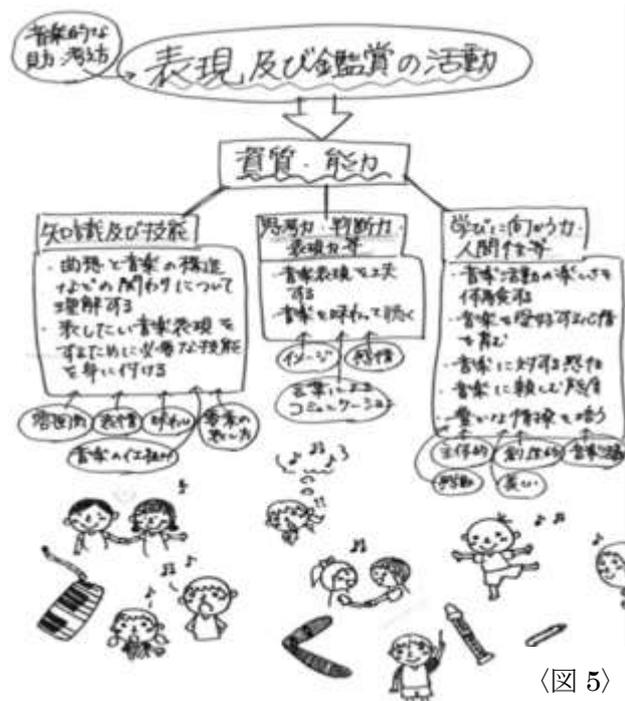
(4) 系統図を用いた可視化

系統図とは品質管理に使用する図であるが、物事の道筋を描いた図である。

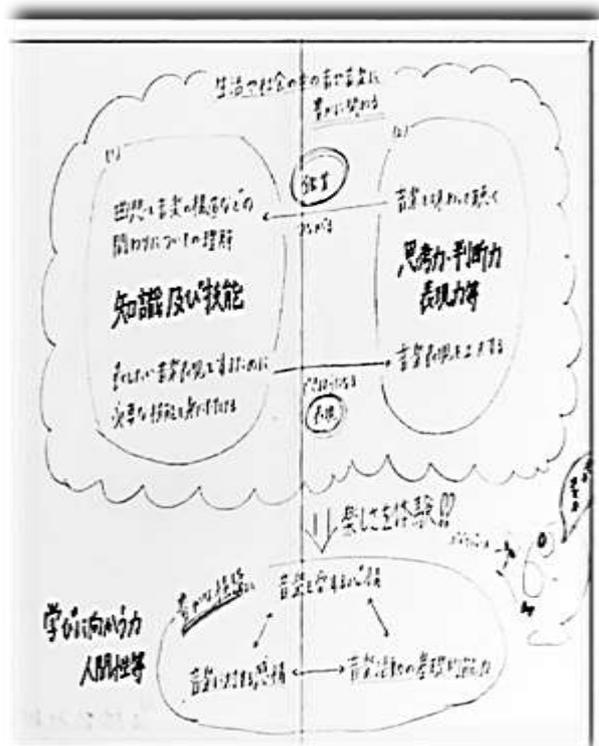
学力の三つの柱をもとにその系統を可視化したチームが5チーム中4チームあった。



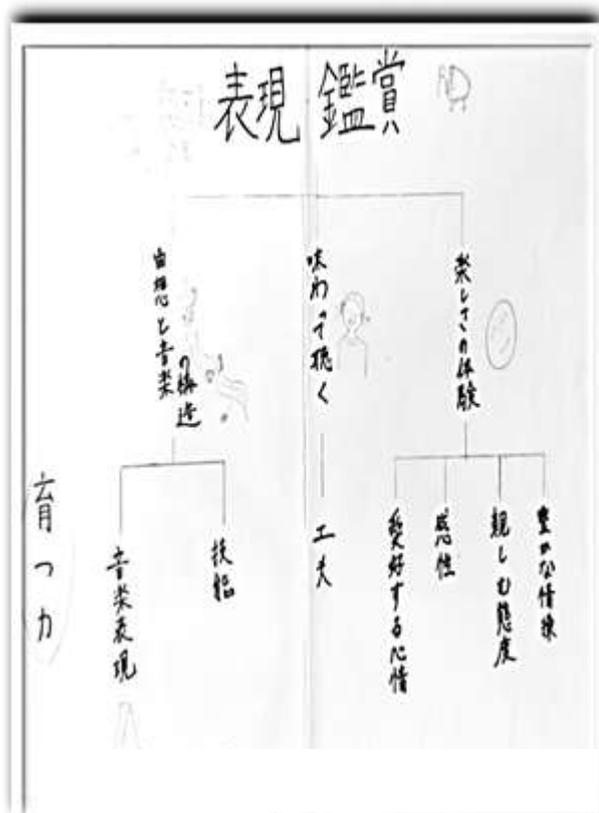
〈図4〉



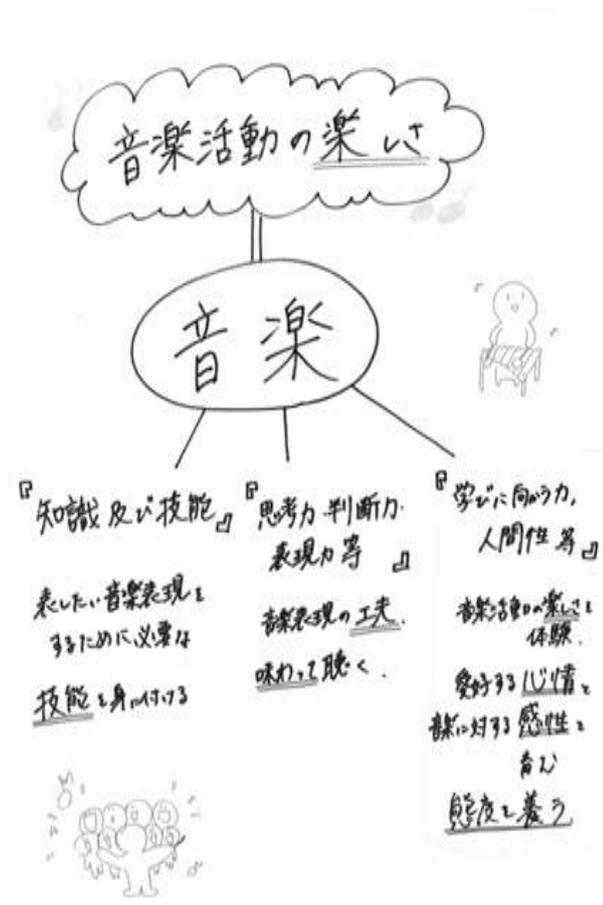
〈図5〉



〈図6〉注1)



〈図7〉



〈図8〉

〈図4〉は、理科専修、〈図5〉〈図6〉は保健体育専修、〈図7〉〈図8〉は英語専修である。

(5) イラストレーションを用いた可視化

イラストレーションとは「本来的には、書物、新聞、雑誌などの文章記述の内容をわかりやすく説明するため、または飾りのために添える広い意味での挿絵。」つまり、形のないものをわかりやすく表現できるという利点がある。しかし、必要以上のイラスト情報は目的を見失う恐れがある。

チームでの取り組みでは一つのイラストにするために他の手法よりもたくさん話し合いが持たれ、最終的に一つのイラストとなった。

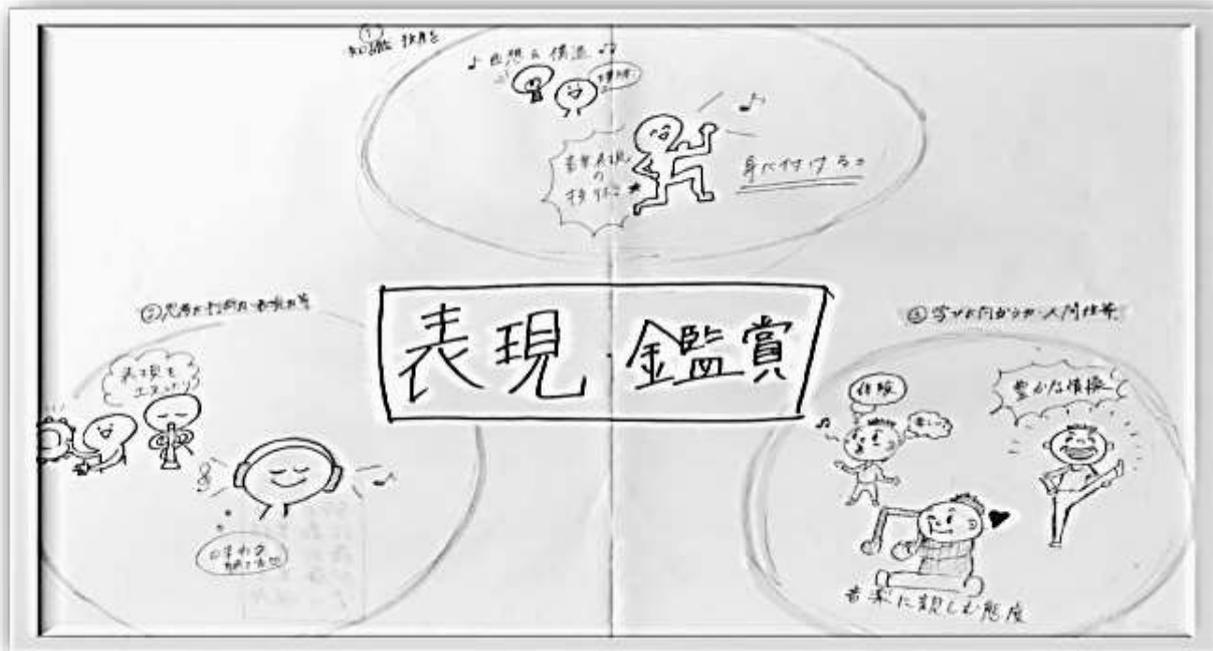
積極的にカラーペンや色鉛筆を使用したチームがあり、分かりやすく表現するために試行錯誤する様子が見られた。



〈図9〉



〈図10〉



〈図 11〉

たくさん話し合ったこともあり、どのグループも情報ゴミがないといっても過言ではないイラストに仕上がった。

イラスト化したチームのひとつが、更にイラ

ストにストーリー性を持たせたいと申し出があり、更にストーリー性あるイラストを用いた可視化に取り組んだ。解説を読み込んで話し合った成果を感じる。



〈図 12〉

5. 考察

(1) のベン図を用いた可視化では「表現」と「鑑賞」の二つの領域が同じフィールド内で示されており、「表現」と「鑑賞」は個々の領域ではなく、相互に関わり合っているということが、明確に示されている。その上に学力の三要素が成り立ち、それらの相互の関連も示すことが出来ており、教科「音楽」の存在の意義を説明できるものである。

(2) のピラミッド図を用いた可視化では教科「音楽」の活動や小目標を「表現の活動のキャラクター」と「鑑賞の活動のキャラクター」が双方から教科「音楽」の本質的な意義の一つである「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」をしっかりと支えており、教科「音楽」の学びの方向性が説明できるものである。

(3) のベクトルスタイルを用いた可視化では小学校6年間の目標を意識したのであろうか左軸に小学校1年生から小学校6年生という表示がある。この図は目標を達成していくことにより、身につく資質・能力を示しており、音楽の学びの構造を意識して、描いたと思われる。しかし、「目標」「資質・能力」に詳細な表示はなく、その点が不足している。

(4) の系統図を用いた可視化では、学力の三要素を軸に可視化したチームが5チーム中4チームもあった。しかしその示す方法は各々異なった。

具体的にみると、図4は教科「音楽」の目標のもとに、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」とあり、この資質・能力獲得のために学力の三要素が位置付けられている。即ち、このチームは、教科「音楽」が「生涯にわたって音楽に親しみ、音楽文化を継承、発展、創造していこう」という基礎的な力を養う」という生涯を視野に入れた教科である事に気づいており、その説明までできる示し方をしている。

一方、図5は(1)の図1と類似の表示であり、「表現」と「鑑賞」という、教科「音楽」の二つの領域は分離せず示され、学力の三要素を示している。図1のように学力の三要素の重なり部分などは示されて

いないが、教科「音楽」の学びについて明確に示されている。

図6注1)は学力の三要素を念頭に置いた表示の方法は前者と同様であるが、「豊かな情操を養う」という言葉を「学びに向かう力人間性等」と同枠内同等の文字で示していることから、具体的な文字表記はないが、図4同様、「生涯学習」まで続く、教科「音楽」の意義を捉え示していることが分かる。

図8は図5とも類似するが、教科「音楽」は教科教育の中で唯一「楽」という文字の入る教科であり、それを上位に掲げている。本論ではその点の詳細については触れず、別の機会とするが、教科「音楽」の授業は主体的な活発な楽しい学びの中で獲得されるものであるということが示されている。

図7は学力の三要素についての系統を示さなかったチームである。教科「音楽」で育ててほしい力をシンプルに表示している。中層の三項目の表示は要検討であるが、この部分にその手段を表示すれば教科「音楽」の学びがより明確となると思われる。

いずれの系統図を用いた可視化もそれぞれのつながりが明示された為、文字のみの目標より趣旨が明確となった。

(5) のイラストレーションで目標を可視化した図9、図10は少ない文字数で、教科「音楽」の目標の先の「生きる力」を見据えたものが示された。

図11は図9、図10とは異なり、どちらかという図1と類似している。同じフィールド内に「表現」「鑑賞」が示されており、学力の三要素の具体的な内容をイラストによって示している。

イラストは必要以上の情報を表示してしまいがちだが、学生らがイラスト化した目標は、情報ゴミは少なくとも簡潔に示された。

あるチームが、自分達のイラストにはとても意味があり説明したいとの申し出があった。図12である。

その説明は「3つの果物が生る木(資質・能力)を育てるには何が必要かな?」と題して「音楽的な見方、考え方」の小さな芽が、やがて「表現」という太陽の恵みのもと、「鑑賞」という鳥が飛び交う「資

質・能力」という3つの果物が生る木に成長していく。3つの果物とは「さくらんぼ」「バナナ」「ぶどう」であり、「さくらんぼ」は、ほぼ同じ大きさの2つの実が生るため「どちらも大切なこととして」、「知識」「技能」を表し、「バナナ」1つの房から数本の実が生るため「思考力」「判断力」「表現力」等を表し、色々な人がいるということで「ぶどう」によって「学びに向かう力」「人間性」等を表す。これら3つの果物が豊かに実る木、これが教科「音楽」の意義であり目標であるとのことである。

このチームのストーリーは学力の三要素の特性を理解したうえで、かつ教科「音楽」の特性も理解しており音楽科の目標を可視化したものの中で最もその本質に迫るものと言える。

6. 授業を終えて

「音楽の授業の中で『技能』が最も大切。」「音楽の授業は技能面が苦手であるとつまらない。」「音楽の授業はいったい何のためにやっているの。」等、稚拙な発言をしていた学生達であったが、本授業の取り組み後「音楽は人を育てる大切な教科だったんですね。」「音楽の授業の中で一番大切にしなければならなかったことがわかりました。」「音楽という教科のゴールの捉え方を正しく理解できました」等と声が上がってきた。これは学校教育における音楽科教育の目標の本質的な意味と、音楽科教育の存在の意義を正しい方向で理解できたといつてよいのではないかと思われ、成果を見ることが出来た。

更に、同じ専修の仲間同士が集まり、コミュニケーションをとりながら、互いに「思考」「試行」し、「高め合い」、「深め合う」ことによって、課題解決をすることができたことは、近い将来教壇に立つ学生にとって有益なものであった。

本研究の取り組みによって音楽を主たる専門としない学生に対し音楽科教育の理解についての正しい方向の理解へと導くことができた。

今後はこの取り組みを継続しつつ、「音楽の授業による意味のある学び」について追求したいと考える。

更に、専修ごとの目標の捉え方について、主たる教科との関連なども探りたいと考える。

文献

文部科学省(2017年),小学校学習指導要領
 文部科学省(2018年),小学校学習指導要領
 文部科学省(2003年),小学校学習指導要領解説 音楽編
 文部科学省(2017年),小学校学習指導要領解説 音楽編
 渋屋隆一(2020.1.3最終更新)業務プロセスを見える化(可視化する3つのメリットとは?),<https://100athlon.com/benefits-visualizing-business-processes/#i-4-sci-pursuit.com>
<https://sci-pursuit.com/math/venn-diagram.html#2>
 塚田 祐子(2020.1.3最終更新),ピラミッド原則!図にすると、上手く話せる<https://allabout.co.jp/gm/gc/297092/2/>
 ブリタニカ国際大百科事典 小項目事(2020.1.3最終更新),
<https://kotobank.jp/word/ベクトル-129246>
 周村 論里(2009年)「大学の教科書におけるイラスト利用の効果に関する研究」『尚美学園大学総合政策研究紀要』18巻 117-132

注1) 図6が不鮮明なための補助資料として作成した図

